

## 時空間ピストル

和光高等学校 二年

楠本 柚月  
くすもと  
ゆずき

四年前の今日、一羽のオカメインコを迎え入れた。独特で愛らしい姿と、穏やかな性格。ぴよんと生えてるアホ毛のような冠羽に、美しい毛並みの翼。「ポッ」と頬を赤らめたような模様は、きつと神様のユーモアだろう。それが秋のあたたかい夕日に似ていたことから、彼女を「もみじ」と名づけた。

髪の毛を啜えて引っ張っては、肩にのぼってくる人懐っこさが本当に可愛かった。立派な羽を持つ割に飛ぶのが下手でよく壁に当たっていたが、人間関係に悩んで落ち込んだ日に静かに飛んできて寄り添ってくれたこと、その優しい感触まではつきりと覚えている。小学六年生の十月から今まで、確かにそばにいたのだ。

そのもみじが姿を消した。家に帰って部屋に入ってふと、いつもなら感じるもみじの気配がないことに気がつく。鳥かごを見ると扉が開いていて、中は空っぽだった。同時に、窓の隙間が目に入る。それを見るや否や、体は勝手に家を飛び出していた。声が枯れるまで名前を呼び、靴の踵を踏んだまま必死に走り続けた。思えば今朝、「いってきます」と頭を撫でた後の閉めが甘かったのかもしれない。ちゃんと確認しただろうか。そんなことは覚えていない。なぜなら今日は本当になんでもない今日だったのだ。たわいもない一日だったのだ。そんな今日、この世で一番の理解者を失おうとしている。

その瞬間、額に冷たい金属のようなものが当たった。現状の異様さから少しずつ足取りが重くなり、荒い呼吸は静まっていく。目の前の景色は変わっていないのに、ただ残り続けるその感覚が恐怖を生んだ。体温を忘れ、あまりの恐ろしさに震えていると、ふともみじのことを思い出す。肩をすぼめ小さく彼女の名前を呟く。すると、はじけるような銃声が響き渡り、景色は一変した。

そこに映し出されているものは夢や幻のようだが、作り物とも思えない。未知の現世であった。秋の美しい紅葉が広がる山奥のようだ。そこに、見慣れた一羽のインコが飛んでくる。それは確かにもみじだった。枝の先に止まり、クリクリと辺りを見回してから、出会った当初一生懸命教え込んだ歌をうたいはじめる。肩の力が抜けて、堪えていた涙がどつと溢れ出てきた。柔らかい信号機色の中で音色を響かせるもみじは、本当に愛おしかった。だが、もう手を伸ばすような真似はしない。もみじは、永遠の別れよりやさしい最期を贈ってくれたのだ。キラキラと遠退いていく光景と歌声：鮮やかな木々に消えていくも

みじを、見えなくなるまで眺めていた。その景色がいつの間にか部屋の天井になったところでハツとする。急いで鳥かごを確認した後、深い溜息をつく、額から何かが床に舞った。

それは頬のように赤い、一枚のもみじの葉であった。後の、思い出のトリガーであった。

審 査 員 講 評 \*\*\*\*\*

物語の冒頭、大切なものを無くした喪失感が強く伝わってきて、実際に作者の方がこの経験をしたのでは？と思わせるほどでした。そしてそれがあったからこそ、引き金がかれた後の描写は切なく美しかったです。短い文章で物語をしつかり書ききれていたところも良かったです。